

いまは亡き吉富先生への断章

友岡敏明

吉富重夫先生は、昭和五一年五月九日未明永い／＼眠りにつかれた。早いもので、もう二年の歳月が流れ去ろうとしている。先生の御温顔と御慈眸に接していたのがつい此の間であったという月並みの感懐を抱く一方、その朝早く、御長男重美氏よりの先生御永眠の報に接して、「えっ？」とわが耳を疑った声を出すのが精一杯であったのは、もう過去のことになろうとしている。冬夏を問わず愛好すべきスポーツをお持ちでいられた先生、御血色もよく風邪一つお召しにならぬほど健康でいられたあの先生が、との驚きも同じ運命をたどろうとしているのである。ただでも時の流れが迅くなっている。科学時代の世の中で、やはり、敢えて棹をささなければ、故人の温もりが何と速かに拡散していくことかと思ひ知らされる。

だが、さもあらばあれ、「塵から出たものだから塵に還る」人間の運命の冷厳な事実の前に個人の感傷が膝を屈したとしても何の差障りがあるう。「塵に還る」のは肉体であって、魂はフリー・ハンドを得ると考えることができる。とすれば、ドクトリン教義もまた善哉。

哀しいことでは勿論あるが、貫禄ある先生のあの御怡幅が朽ちても、柔和に充ちた御温容に滲み出るあの鍛えられた先生の御人格——御魂は、もはや時間の秩序に属しはしない。苦しかるべき御入院中のベッドで、ついにその一語を最後まで発せられなかったと聞く先生のあの御意志の力は、だれのために御功德をお積みになったのか。それは、私のような小人の忖度を越えたことである。けれども、それは、私のごとき学問上の弱輩の精進を願われてのことではなかったか、と私は密かに想ってみる。少なくとも私にとってはっきりしていることは、そうした鍛えられた先生の包容力と寛容の精神こそ、私が「*Requiescat in pace!*」と祈念するとき、その昔、哀惜の念をこのラテン語に託したが故に訴追されたあのジュネーヴの一人の運命をたどることをお許しにはならない尊い遺産である、ということである。

火・木曜日は先生の御出講日であった。それは、母屋を取ってしまった弱輩に遠慮をなさる先生をお見かけする機会でもあった。先生は、御自分の研究室にわざわざノックをして入って来られる「教授」でいられたのである。そんなある日の昼食後、「本誌——『神戸学院法学』——にも何か一つお書き下さい」という不躰けな私の催促は、「ウン、書かなければいけません、ちゃんとしたもの」という尻上りの語調の真剣なお答えで受けとめられた。しかし、シビル・ミニマムよりも一層包括的と密かに自負された吉富行政学上の概念「行政需要」を、さらに錬成し拡充する学問的課題を御自分畢生のものとも語られた先生は、今はおられない。行政学のまったくの門外漢である私ごときは、この先生の知的遺産を誰か継いでいることであろうと祈ることができるばかりである。だが、専門分野における学問的組織化はさておいても、人や主義よりも学問そのものを御覧になる先生の厳しくも温く光る御目

差しに触れた者は多いと信じる。こうして無言の励ましを受けた者の末席に連なる私自身、先生の御恩に報いる責任を感じるものである。御魂の御芳香をお遺しになって逝かれた御在天の先生、いま一度、*Requiescat in pace!*